

終戦後の世界

綿あめ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平和な世界や（白目）

提督歴半年の主が描く艦これの世界です。

終戦後、鎮守府に艦娘と共に住むと決めた提督の割と平和な生活を抱く日常物語。

前記通り提督歴半年ですので、おかしな表記等がございましたら申し訳ありません。

目次

カレーってなんだよ	1
日常って何が定められたら日常なんだ	12
早起きは三文の損だ	24
ぼのたん☆許すまじ	36
安定しない記憶	45

カレーってなんだよ

それは実に呆気ないものだった。

私達が戦っていたのは抗えるはずもない存在。圧倒的な戦力の前に命を落とす人間さえもいた。沈んでいった同胞もいた。相手は目に見える敵だと決まった訳ではなかったから。

私達が戦っていたのは『海』そのものだったから。

海のすぐ近く、機械音が鳴り続けていた工廠があり、今は普通のお風呂として使われている入渠室があり、船を迎える母港を兼ねそろえている元鎮守府、彼はそこに住んでいる。

戦争を終え、多くの提督は運営からの援助金を得て隠居等する者が多かったがこの提督は鎮守府に残った。

『住み慣れていて、案外暮らしやすいものだからさ』と本人は言っているが本心はわからない。

艦娘の艦装を解けば人間になる事は証明された世界で、色々な人生を進んでいく艦娘達だったがこの艦娘が人間になっても残っているのは、この提督との絆故なのか。

まあ私もその1人であることには変わらないが。

この提督は戦争に終止符を打った三人提督の1人、御国もこの提督には頭が上がりな
いみたいだね。ここで艦娘と暮らすと言った時は生涯の金銭面を保証するなんて言わ

れてさ。正直驚いた。脅しなど使わずにあんな待遇をされるなんて。

まあそのおかげもあつて私達はここで楽しく過ごせているんだから感謝しないかね。つてこんな事言うのももう2桁後半を超えてるか。

ナレーション役なんて買わなきや良かったよー。私にはちよつと難しいや。何が言いたいかと言うと、とにかく終戦後も楽しく過ごせてるつてこと！見るより観る方がわかりやすいよね。

1人の少女は微笑む。

周りを包む騒音にも聞こえる拍手。

物語は新しい幕を開ける。

『飛龍』は1度礼をした。

—提督が起床しました。

—これより幸せな1日が始まります。

4 カレーってなんだよ

「…何かがおかしい。」

元執務室。今では提督の私室。艦娘のたまり場。

特に予定のない艦娘数人と提督はそんな部屋でゴロゴロしている所だった。

「ん？どしたの提督ー。あ、おはよー。」

「おはよう。…なあおかしいとは思わない？ここさ、一応俺の寝室な？なんで目を覚ましたらお前ら普通なノリで遊んでんの？」

「え？そんなの提督やってる時からじゃん。」

「言葉遊びありがとう鈴谷。でも納得はいつてないからな？」

漫画を読んでる漣と曙。ゲームをしている鈴谷。ティータイムをする熊野と金剛。トランプをしている第六駆逐隊の子。

「good morningデース！提督うー！」

「ああ、おはよう金剛。ついでに俺にも紅茶をいれてくれ。もう、なんか寝起きなのに疲れた。」

金剛が席を立ち紅茶の準備をする。…椅子が3つある事から提督が起きたら一緒に飲む予定だったんだろう。その予定通りか提督は特に不思議がる様子もなく、空いてい

る席に腰を下ろす。

「あら、私には挨拶なし?」

「はいはい、おはよう熊野。」

「あらあら、おはようございます提督。」

「…陸奥かお前は。」

「へーイ! 提督の紅茶デス!」

「ああ、ありがとな。」

金剛が席に着くのを待つてから紅茶をいただく。茶葉の香りの楽しみ方なんて知らない提督は普通に味わう。無論、おいしい。

「つと、ところで他の姉妹はどうしたんだ?」

「比叡達ですカー? 榛名も霧島も比叡のカレー作りを手伝ってますヨ。みんないい子ネー!」

「お前はいいのか?」

「私は味見します! どんな味になりますかネー。もとい、毒見になりますかネー…。」

金剛さんまじお姉さん。1番危険な役を買ってでるとは…。そろそろ比叡も自分の殺人カレーがやばいことに気がついてまともなカレーを作ろうと努力してんだな。1番はもう作らないって決断に至るところなんだけど、まあ嫁の貰い手を考えるなら上達

しないとな。

「…さて、ご馳走様。」

「お粗末様です。どこかにおでかけデスカー?」

「ん? あー、朝食を取るだけさ。」

「いつてらつしやい、あ・な・た・♡」

「奥さんならここでご飯を用意しとくものだ。」

金剛のおでこをツンつとつついてから提督は執務室を後にする。「ひどいデース!」なんて声も聞こえるが無視だ、無視。ひどいと思うなら大和撫子について勉強しろ。…いや、金剛なら案外嫁の貰い手なんて簡単に見つかりそうだけど。

窓から差し込む陽の光は快晴だと告げんばかりに暑苦しい。廊下に備え付けられている窓を開けると少し涼しい海風が髪を揺らしてくる。和気藹々と追いかけてっこ等して遊んでいる駆逐艦を見ると、こう、父性をくすぐられる…と考えたところで窓を閉めて食堂に足を運ぶ。駆逐艦に混じってる背丈の大きい戦艦が見えたのは幻覚だ、幻覚。戦時中に最前線で戦った勇ましき日本の誇りがあんな顔で駆逐艦と遊ぶはずがない…遊ぶはずが…。

「あら、提督。おはようございます。」

「ああ、おはよう間宮。なんか、適当にご飯をくれ。」

「お顔が疲れてますね？どうかしましたか？」

「聞かないでくれ…。廊下でいろんな奴に絡まれてここにたどり着くのに1時間かかったところなんだ…。」

「はぁーい。」

クスクスと笑いながら間宮は調理室に入っていく。ふと時計を見てみれば時刻はもう11時、もう時期昼時で艦娘達が溢れ返ってくるか。起きる時間が遅かったといえ、これは遅すぎる朝ごはんか。いや、早い昼ごはんか。

「あ、提督だー！一緒にご飯食べるっばい！」

「間宮さん、ごめんね。提督と同じのを2つお願いします。」

「おう、しぐぼいコンビ。他の姉妹とは一緒じゃないのか？」

「白露姉さん達は街に買い物にね。僕は夕立の子守りかな。」

「夕立は子供じゃないっばい！」

たまたま早めの昼食を取りに来た夕立&時雨の犬コンビが提督と同じ席につく。夕立はすすすすと調理室から漂う匂いをかいでるところを見ると本当に犬に見える。ち

なみに犬と遊ぶ時に使うボールを投げると取ってくる。何が言いたいかと言うと犬だ。

「にしても二人とも昼食早いな。これからでかけるのか？」

「散歩に行くからね。」

お前もか、時雨。

「もちろん夕立のね。」

それはひどいな。

「楽しみっばい！」

いい加減自重しろよ。

「まあ、お前達が楽しいならいいんだ、楽しいなら……。」

「もちろん楽しいさ。戦時中はこんなのにんびりできなかつたからね。今の時代が平和

だって痛感できるよ。」

「まあ、そうだな。」

：お前ら戦時中も非番の時に散歩してたろ。知ってるぞ、しっかりと夕立にリードま

で付けてたの。

「はい、今日のお昼ご飯はカレーよ。」

犬コンビと談笑していると間宮がご飯を持ってきた。やけに早いなと思うとまあカ

レーならそうなるかと理解した。

「と、提督さんはこちらのカレーね。とある艦娘さんから食べて欲しい！ って言われちゃったの。」

「ん、そうか。頂くよ。」

ふむ、とある艦娘か。まあうちの艦娘達のほとんどがカレー作りが得意だから誰かまではわからないか。その大半がおいしいカレーを作るし、犬コンビには悪いけど、絶品カレーを頂くぜ。いや、別に間宮のが絶品じゃない訳じゃないけどな。

「もぐ…もがつ!? ぐおおおお…!!!」

「て、提督!? どうしたっぼい!？」

「み、水水水!!!」

「はい! 水だよ!」

「ありがとう…っ!」

な、なんだこのカレー…は…!?

いや、カレーかこれ!?

カレーじゃねえよ!

カレーってなんだよ!

カレーってなんだよ (哲学)

カレーってなんだよ… (白目)

「ま、間宮…誰のカレーだ？」

「比叡さんのですよ？」

「金剛お!!!」

提督の叫び声は鎮守府中に響き渡った。

「おっと…提督に見つかる前にでかけるとするネ。」

今日も鎮守府は平和だ。

日常って何が定められたら日常なんだ

『海』と戦う。

聞けば何を言っているんだ？と思うだろうが私たちが戦ってきたのは確かに『海』だった。

深海棲艦がどこから生まれて、なぜ人間を襲うのか。終戦後の今でもわかつてはいないことだらけだが、わかかってしまったことはあった。

深海棲艦の正体、それは70年前の私たちそのものだった。姿は違えど、当時海に沈んでいった私たちの鉄が命を宿し、人間を襲ったことは最後の作戦でわかった。

いくら深海棲艦を撃滅しようと、その鉄は再び命を吹き込まれて蘇る。沈んでいった艦娘たちの鉄からも無論、深海棲艦は作られていった。

つまり私たちは無意味な争いを続けた。いくら深海棲艦と戦おうが数が減ることはない。沈めば深海棲艦の数が増える。その原理に気づいた3人の提督によって終戦を迎えることはできたが、沈んだ艦への想いは拭いきれない。

今はもう人間という新たな人生を手に入れた私たちが、艦娘だったころの想いは忘

れてはいけない。同胞たちの為にも私たちは幸せにならなければならない。私はそう思っている。戦艦『長門』と呼ばれた私はそう思っている。

長門は一度礼をする。

再び頭を上げてみれば皆が真面目な顔でこちらを見ている。

艦娘だった彼女達も同じ考えをしているのだろうか。

カチツカチツ

ジユツ

フーツ

吸っているもので、今では日課のような吸い方をしていく。提督にとってタバコは戦時中から

戦時中はもちろん何もかもが上手くいくわけではなく、イライラが募る事は度々であった。その時に吸っていたタバコ『モーロボロ』は戦争が終わった今では愛着が湧くように吸っている。

「提督ー、タバコやめないの?」

「…ふーっ。そうだな、戦争を忘れたくない誠意で感じだな。」

「んー、かっこつけてる感じはわかるんだけど、提督に似合わなさ過ぎて鈴谷吹き出しそう。ごめん、無理、吹き出す。ブフオwwww」

「お前覚えてろよコノヤロー。」

鈴谷が床を転がる程大爆笑した事に呆れて、まだ3口しか吸ってないタバコの火を消す。別に物凄く吸いたかって程ニコチン中毒な訳でもないから、やめようと思えばいつでもやめれるノリで吸ってるものだった。残り香を名残惜しむ事もなく、タバコは机の引き出しにしまい、まだ笑いこけてる鈴谷の頭を足でつつく。

「や、ひどーい!私これでも乙女だよ?乙女の頭を足でつつくなんて信じらんない!」

「安心しろ、そもそも乙女は床を転がらん。つまりお前は乙女ではない。」

「え、今日ほど提督をクソだと思ったことないわ。」

「乙女はクソなんて言わないぞ。」

「今日日程、提督が人間の底辺に属する蛮族だと認識した日はごさいませんとす。」

「日本語がおかしい。」

ここの鎮守府にいる艦娘の数は3桁にいつてるから、もちろん顔を毎日合わせない娘たちもいるのだが、鈴谷とは毎日会ってる気がする。気がするんじゃないやなくて会ってるんだな。こいつ、朝起きたら必ず執務室にいやがる。

執務室に備えられている窓を開けて朝の日差しを浴びる。んつと軽く伸びをして太陽を薄目になりながらも見てみる。うん、今日もいい天気だ。久しぶりに出掛けるとかも良さそうかもしれないな。…まあもちろん誰かに邪魔されなければの話なんだけだな。

「んじゃ俺ちよつと外行ってくるわ。」

「おつ、ニートやつてる提督が外に行くなんて珍しい。どこまで行くの?」「ちよつと散歩するだけさ。」

どうせこいつは1日中ここにいてのはわかってるから、特に何も言わずに執務室を後にする。俺にニートとは言うくせに、1日中執務室でゴロゴロしているお前の方がニートじゃねえか。まあそんな事言ったらマシンガントークで文句言われんのはわかってるから、面と向かつては言わないだけだな。

適当にぶらぶらしてみるのもたまにはいいかもしれない。外で遊んでるのと言えば

やっぱり駆逐艦が多いな。追いかけてこしたり、かくれんぼしたり、元気に遊ぶのはいい事だな。だがやはり妙なんだよなあ。明らかに背丈が駆逐艦じゃない奴が一人だけ混じっているんだよなあ。あれはどうみても戦艦だよなあ。噂をすればなんとやら、その元戦艦の彼女がこちらに気づいて近づいてきた。

「む、提督ではないか。何をしているんだここで？」

「そっくりそのまま返してやるよ長門。…お前、どうした？」

「それはどういう意味でだ？」

「お前が駆逐艦っ子たちを追いかけている顔は犯罪者まさにそのものだったぞ。」

「ダアニイイ!？」

いや、そんな驚かれ方をされても知らんよ。てか自覚なかったんかい…。涎垂らしながら駆逐艦を追いかけ回すそれは誘拐犯か何かと思つたよ。戦時中は駆逐艦相手に厳しくも愛ある指導をしていた戦艦長門はどこにいったのやら…。(ゝqゝ)

「ま、まあ、いいんじゃないか？みんなで仲良くやれてるなら気にすることもないんじゃない？いや、知らんけど。」

「…お前な、私だつて華の女の子だぞ？」

「悪かつたつてー。今度どつか飯屋連れてくるからさ。」

「ふむ、まあいいだろう。では私は戻るぞ。……島風〜！島風ええ〜!! (ゝqゝ)」

ほんと自重しない奴だな。

鎮守府の庭、端の方の少し日陰になっているところでシートを広げてピクニックしているのは空母組。まあ鎮守府敷地内でやってるからピクニックと言えるかはわからないけど、本人達が楽しいならいいんじゃないかな？

一航戦の赤城と加賀、二航戦の飛龍と蒼龍、五航戦の翔鶴と瑞鶴で南雲機動部隊の完成だな。そこに雲龍たちまで混じってまあこれは本当に空母会だな。

昼間から酒を飲むなんて、羨ましい奴らめ。てか瑞鶴、そろそろ加賀さんを煽るのやめときなよ。加賀さんの目のハイライトが消えてるぞ？おいこら、ずいずいするんじゃない。ずいずいするんじゃないや。あ、言わんこつちやない。加賀さんにラリアットくらってんじゃないか。

全く、仕方ないな。

…だがまあ、何か瑞鶴の気持ちもわからなくもないな。楽しそうだし。どうせ加賀には見られてないんだから俺もやっておくか。

ズイ (? ⊠ ⊠) ? ズイ

ズイ (? ⊠ ⊠) ? ズイ

ズイ ((? ⊠ ⊠) ?) ズイ

「ていとく?」

「え、あ、加賀さん…?」

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ!

俺は今加賀から15m程離れていると思つたら、いつの間にか加賀は俺の目の前にいた。

何を言っているかわからねえと思うが俺も何があつたのかわからなかつた…。

頭がどうにかなりそうだった…。催眠術とか超スピードだとか、そんなチャチなものじゃあ断じてねえ。もつと恐ろしいものの片鱗を味わつたぜ…。(ポ○ナレフ状態)

「加賀さんちよつとm…プゲラっ!」

「…ただいま。」

「おかえりー。ってどうしたの？目が死んでるのはいつもの事だけど、なんかこう、どうしたの？」

「おう、いろいろあつてだな…。」

…全く酷い目にあつたぞ。加賀め、元上司の俺にも容赦なくリアアツトをかましてくるとか、お前本当に人間かよ…。いや、確かに煽った俺にも批はあるけど、あの距離を一気に詰めてきたのか？馬鹿な…超スピードとかじゃあないぜありや…。

…何はともあれ疲れた。まだ時間的には三時頃。みんな大体間宮のところまで甘味を楽しんでるところかな？俺もいつもは間宮の甘味を頂いてるけど、今日は気分のらないしな。丁度ここには鈴谷という玩具もあるし、鈴谷で遊ぶか。

「なあまずy…？」

「ドーモ、テイトクⅡサン。テイトクⅢスレイヤーデス。」

「アイエエエエ!? ニンジャ!? ニンジャナンデ!? マダヒルダヨ!?」

「おー! 提督乗つてくれるねー!」

「…まあ、そうだな。お前が昼から顔出すあたりが珍しいな。」

かわうちめ、いつもは夜しか行動しなくせに今日は昼間から行動開始していたのか。いや、これを機に夜型生活をやめてくれれば健康的にもいいし、人間らしくできるとは思うんだけどな。多分無理だな。こいつ気まぐれだから、明日にはまた夜型生活に戻ってるだろうし。

「にしてもなんでまた今日は昼間からいるんだ?」

「いやそれがねえ、あと1時間もしたら那珂のライブだからね。」

「お、川内はお姉さんだな。それじゃあ俺も見に行くとするか。」

「是非とも来てよー! じゃ、私はそれまで仮眠をとるよー。」

「ああ、おやすみな。」

…うん、川内はこれで那珂のライブにはこないな。この時間に寝て仮眠とるっていつでも、目覚ましかけたとしても起きないだろ。夜中に目を覚ましてライブの事はすっかり忘れては暴れまくりそうだなあ…。そろそろあの夜戦バカについてしつかりと考えなきゃダメな時だな。

「なあ鈴谷。」

「ん？なにになに？」

「…そろそろ平和な日常を過ごしたいと思うのだが、どうすればいいと思う？」

「不可能な事を考えてはダメだねー。」

「可能な事だから考えてるんだよ。」

「未来に想いを馳せる事は良い事だけど、地に足のついた考え方をしないとそれは夢物語でしかない。」

「…どこで覚えた。」

「エルシャ○イ」

「はあ…こんな人生で大丈夫なのか俺よ。」

大丈夫だ、問題ない。

これが一番いい日常です。

まじで？え？俺の中の天使と悪魔は口論する訳でもなく意気投合すんの？喧嘩するのがテンプレートってか、喧嘩しなきゃいけない仲だろお前ら。…まったく、心の中まで平和ボケした人間だな、俺は。

提督の1日は過ぎていく。

「なんでライブ来てくれなかったの！提督！」

「すまん、寝てた。」

無論、昼寝してライブには行けなかった。

「今からここでライブやる！川内お姉ちゃんも起きてきたことだし！」

「やめろお!!!」

今日も鎮守府は平和だ。

早起きは三文の損だ

平和になった今だからこそ、戦時中を昔話のように語れる。戦争が終わったからこそ戦争を語れる。戦争を知らないのに戦争は語ることができる。

多くの艦娘のみならず、多くの提督の命も落とした最後の作戦はそれはまさに最後、エンディングを飾るには十分すぎるハッピーエンドにして、バッドエンドだったのかも
しれない。

終戦後、艦娘達の社会復帰は絶望的なものだった。戦争しか知らない、むしろ戦争する為に生まれた艦娘達に人間と同様の暮らしを行うのには無理があつた。終戦後すぐに起きた問題がそれだった。

人間に戻れば無論お腹は空く。満たすのは燃料でも弾薬でもない、人間と同じ食料を定期的に、人間と同様に取らねば艦娘達も息を絶えてしまう。お金の稼ぎ方を知らない艦娘にとっては絶望的な未来だった。

終戦後にお金を手に入れるために非行に走る艦娘だつて数多くいた。提督に嫁いだ艦娘もいれば、提督の側を離れる艦娘だつてもちろんいた。その数は4桁後半はいたんじゃないかな。そしてその大半が犯罪を犯して刑務所へと入つていった。

実は終戦から2年経った今でもこの問題は解決されてはいなかった。御国の為に戦って英雄扱いされた艦娘も、今では犯罪者扱い。例え犯罪を犯していない艦娘ですら、まるでゴミを見るような目で見られる。結局人間なんて、艦娘を都合のいい道具としか考えてないみたいだね。提督達を除けば。

プリンツ・オイゲンは深々と礼をする。

ドイツの艦だった彼女も今では流暢な日本語で語る。それはまるで人間を貶すように、尚も人間らしい顔で彼女は周りを見渡す。

「4時…だと…!?!」

目が覚めて辺りを見渡すとそこには誰もいなかった。いや、いないのが本当は当たり前なのだが。ついに奴らが執務室で遊ぶのをやめたのか、と思いい時計を見るとこれだ。早起きしたから誰もいなかったのだろう。つまり、これから鈴谷達が来るということだ。

このまま奴らが来て、早起きした俺を見たらどうなるか。わかりきってるな、珍しがって変に絡まれるのが見えている。今からもう1度寝ようとも思ったが、4時に起きた事に驚きが隠せず眠気が飛んでしまった。…まあ健康にもいいし、少し散歩でもするか。

提督時代に着てた事から愛着が湧いて、今でも着ている提督服を羽織る。白を基準とした下地に左胸の所で煌めく勲章は元帥の称号を示すもの。元帥の勲章の下には甲勲章と呼ばれる物が6つ輝く。今の世の中ではなんら驚くものでもないが、戦時中ではこ

れだけでも驚く提督たちが多くいた。：まあ元帥になる為に毎月頑張ったからな、あの時が懐かしいや。

階級は月毎に集計された。その中でも元帥に選ばれた人物はこれからの活躍が期待され、開発では作れない装備品等が本営から支給されていた。多くの提督はその報酬に目がくらみ、月毎に戦果稼ぎを務めていた。

今となればよく出来ていたやり方だ。報酬に目がくらみ積極的に出撃させることで深海棲艦を撃滅しようとしていたんだな。それがあゝの意味、深海棲艦の輪廻を回す事になつていたんだけどな。

下準備も終わらせ、一息を吐くと執務室を後にする。窓からは朝日が登っていくのが見える。

きつと今日も快晴だ。

それでもつて、今日は平和だ。

「終わった、俺の平和が。」

「鈴谷の顔を見て第一声がそれとかひどくない？遠まわしに、いやストレートに喧嘩

売ってるでしょ。」

ルンルン気分で廊下を歩いているとこれだ。鈴谷と鉢合わせた。なぜだ、どういこうとなんだ……。今の時刻は4時。4時だぜ？社畜も眠る時間だと言うのになぜこいつは起きているんだよ。何してんだよ。

「なんで朝っぱらからお前が居るんだ……。てか、いつもこの時間から執務室にいるのか？」

「そだよー。熊野が夜更かしするとうるさいからさ、いつも早寝して早起きしてんの。んで暇だから提督の部屋にいるわけ。どうーゆーあんだーすたん？」

「NOだよ、NO。早寝早起きはいいいことだが、俺の部屋に朝っぱらから居座るんじやねえよ。」

まあ、お嬢様気質な熊野と同室なら鈴谷も早寝になるのもわかるな。そこはわかって、朝から俺の寝室に来るのはわからない。ゲームやるなり漫画読むのも自室でしろよ……。

ここの艦娘は女としての自覚が少し、いやかなり足りてない。仮にも男である俺の部屋に平気で居座るこいつらを本当に理解出来ない。

「ま、それはいいとして提督今日は早起きかー。何してるの？」

「時間が経てばお前らが来るのがわかってたから散歩をしようと思っていた。」

「なんで過去形？」

「お前に出会ったおかげでその思いも消え去ってしまった。」

「ひどい言われよう……。ま！提督の考えを最優先して、その散歩に鈴谷も同伴するわ！」
「ああ、やっぱりそうなるのね。」

「ここで大人しく執務室に戻っても鈴谷がいる、散歩を続けてもこいつはついてくる。どの道を通ろうが鈴谷は近くにいる。：ねえ、これってどんな拷問なの？一般人が聞けば羨ましいぜこの野郎、とか言いそうだが勘違いしないでほしい。こいつが近くにいると絶対に何か良くない事が起きる。」

：はあ、平和が欲しい、切実に。」

「んー、朝もいいもんだねえ。」

「そうだな、別に昼がうるさいって訳じゃないけど、朝には朝の静けさがいいってもんだ。まだみんな寝静まつてるこの時間は、俺にとってここまでの安らぎを与えるとはな。お前が居なきやなお良かったわ。」

「ねえ、鈴谷のこと嫌いな？」

「嫌いじゃないけど、お前が近くにいと良くない事が起きる。」

「そんなわけな「パシヤ!」…くもなきそうだったね。」

「あ…あ…青葉見ちゃいました!」

「一番良くない奴に見つかった。」

プライベート、盗撮なんて知った事かって面で俺と鈴谷を激写した人物が目の前にいる。戦時中は古株として大変活躍してくれた青葉。今ではうちの鎮守府のパパラッチだ。

…あー、良くない気がしてならない。

「あー…その写真をどうするつもりだ?」

「無論、記事にします!提督と鈴谷さんが朝からデートしてるのを証拠として捉えたからにはネタにするしかありませんね!しないって判断を下すことなんてできませんね!むしろしなきゃいけない使命感に駆け巡らされますね!」

駄目だこいつ…早くなんとかしないと…。今も「見出しはどうしましょう?提督、ついに女に手を出す!とかどうですか!」なんて事言つてやがる。マジでもう…なんなん…。

「青葉…やめろよ?」

「無理ですわね!」

「仕方ない、今月のお小遣いは8割カットになるな。うん、仕方ない事だ。」

「わ！わ！困ります！記事にはしませんからあ！」

「わかればよろしい。」

こんなの記事にされたらたまつたもんじゃない。金剛あたりが凸つてくるに決まつてる。ヘーイヘーイヘーイって扉をノックされるか、はたや榛名も共に来られたら手のつけようがなくなる。あいつらが俺のことを好きでいてくれるのは正直嬉しいけど、愛情表現にも限度というのがあることをそろそろほ覚えて欲しい。

「はあ…で？お前はなんでこんな朝早くに起きてるんだ？」

「ブーメランって知ってますか？」

「解体するぞてめー」

「冗談ですって！青葉は基本的にこの時間は起きてますよ。朝方というのは先程みたいスクープ盛り沢山！起きてないと損ですよ。」

「ああ、そうなのね。」

正直、興味の欠片もなかった。てか、こいつどこでこんな煽り方を覚えたんだよ。冗談とはいえ、流石に血管が切れる気がした。ただでさえ、平和を（隣にいるアホ）に奪われて萎えてたのに、盗撮紛いの事をされて尚機嫌が悪い。

「じゃ！そゆことでー！」

「おー、あの写真は消せよー。」

「明日の朝刊をお楽しみにー!!」

「…。」

「て、提督?」

「あー…良かったな。今月少しお小遣い増えるぞ、あいつにやるお小遣いはたった今なくなつた。」

「あはは…あまりイジメないであげなよー。」

いじめるも何もあるか、いじめられてるのはこつちだよ。早起きは三文の得とは言うけど、早起きしたあかつきには三文は損しかけてる。いや、これからもつと損になりそうな気がしてきた。

「ただいまーつと。」

「なんで執務室なのにただいまなんて言つてんの?」

「なんか、自分の家に帰つた気がするんだよ。まったく…お前と会つたらやつぱり不運

に見舞われるな。」

「なにそれ！提督やつぱり鈴谷のこと嫌いでしょ！」

ギヤーギヤーと文句を垂れる鈴谷にデコピン一つかましてから、執務室に備えられた長椅子に腰を下ろす。自然とふうーつと息が漏れると同時にドツと疲れが襲う。：やつぱ慣れないものはしないもんだな、早起きの散歩がまさかこんな感じでS A N値を削ってくるとは思ってもいなかったよ。：まあ、でもなんだかんだ悪くはなかったな。

「失礼するネー。：ワツツ!?提督がもう起きてるんですカー!?!」

「あー、おはよう金剛。今日は早くに目が覚めたんだよ。」

「そうなんですカー。少し待っててくださいネー!今紅茶を入れるネー。」

「おう、さんきゅー。」

朝一番から金剛の紅茶を飲めるのはやつぱ嬉しいものだ。割と紅茶は好きだし、金剛がいれる紅茶は美味しいからな。金剛の紅茶を飲んでやつと俺の1日が始まるって感じでもあるし、やつぱ金剛はお姉さんみたいな感じだな。

「ノーノー、私は提督のお嫁さんネー！」

「：いやまてよ、何平然と俺の心を読んでるんだよ！」

「読んでないヨー?口に出してたネー！」

「なん…だと…!?いや、まあそうだな。俺から見たら金剛はお姉さんだけど、身近な世話

をしてくれる点から見れば、奥さんに近い感じだな。」

「ウンウン！嬉しいヨー！」

「あ！ちよ！それなら鈴谷の方が提督といる時間長いから、鈴谷が奥さんじゃないの!？」

「お前は手のかかる幼馴染みって感じだ。」

「どこら辺がさ!?!提督の奥さんみたいに接してるのに!?!どこら辺が手のかかるなのさ!?!」

「そこら辺だよ、めんどくさいノリとか。」

「意味がわかんないよ！」

「だから心を読むなよ！」

「口に出してた！」

「そうか…って、口に出してないだろ！やっぱりお前から心読んでるだろ!?!どういう仕組みだ！」

「明石が提督の心を読む装置を作ってくれたネ。少しお値段高めだけど、買って良かったと思ってるヨー。」

「また明石かよ！あいつ何作ってんだよ！」

あ、明石の発明品で俺に迷惑が被るのはこれで何回目だよ…。てか、なにちやつかり販売してんだよあいつ！ええい、やってられつか！あいつのところには直接乗り込んで販

売中止させてやる！

「と、ところで何人の艦娘がその装置を持っているんだ…？」

「ん？もちろん全員だよー。ほら、鈴谷が首にかけてるこのペンダントがそれ。」

「明石い!!!」

今日もまた提督の元気な声が鎮守府に響き渡る。その声で艦娘が目覚めて、いつもの朝を迎えられていく。

今日も鎮守府は平和だ。

ぼのたん☆許すまじ

これはあたしの憶測にしかならないけど、深海棲艦っていうのはもしかしたら神様なのかもしれない。地球は誰のものでもない、母なる海によって生命は生まれたけど、地球はその生命体ものではない。

それなのに人間は我が物顔で地球に居座る。他の種を飼い、或いは殺し、人間が生きやすい環境に地球を作り替えていった。だから神様は人間を滅ぼそうとしたんじゃないかな。生命の母である海より生まれた生命体深海棲艦は、そんな人間を滅ぼして新たな世界を作ろうとしたんじゃないかな。

破壊と創造は誰にでも出来ることだけど、破壊で創造をすることは誰にでも出来ることじゃあない。破壊することだけ何かを創造できるのは神様だけなのかもしれないね。だからこそ地球の汚染物となった人間を破壊、あるいは破滅させることで、海からまた新たな生命体を創造して、地球に元からいた人間以外の種と共に新しい地球の創造を行うおうとしたんじゃないかな。

まあどうなんだろうね、あたしにはわかんないや。だってただのあたしの妄想でしか

ないんだから。でももしそうだとしたら、人間は神様を殺したことになるのかなあ。艦娘は神様を殺したことになるのかなあ。

阿武隈は遙か彼方まで続く水平線を見つめる。

この憶測がもし正しいのであれば、神様はまた新たな神様を作り出して人間を滅ぼしてくるのかな。

「クソ提督いるかしら？」

「イケメンな提督ならいるぜ。」

「鏡見てきなさい、3流以下の顔面兵器をイケメンとは言わないわよ。」

「んだコラー!!」

昼下がりに、昼食を取り終わり執務室でコーヒーを嗜んでいると扉が開かれた。入ってきたのは曙、相変わらずの減らず口で提督を罵る姿は誰もが知っている曙そのものだった。

「そんで、何しにきたんだ？」

「んー、大本営の判が押された手紙が届いたわ。でも今は大本営ないよね？怪しいけど、まあ提督に渡せばなんとかなるかって。」

「ほう？貸してくれ。」

「ん」

曙から手紙を手渡しされ、封筒を見る。住所等の情報は一切書かれてはいないが、曙の言う通りに大本營の判が押されている。大本營の判が押されているなら、少なくとも海軍だった自分に無関係とは言えないものか。テープで固定された入口を丁寧に開き、中身を取り出す。そこから出てきたのは一枚の手紙、封筒と同じくそこにも大本營の判が押されていた。

「…手紙にしては随分と重要な感じをさらけ出してるなあ。…ねえ、これ読まなきゃダメ？」

「逆に読まない選択肢が存在していた事に驚きだわ。」

「やかましーわ。はあ…もう俺は海軍じゃないんだから、こんな面倒くさそうな手紙読みたくなえなあ…」

文句を垂れつつも丁寧に折たたまれた手紙を開く。開くとそこにも大本營の判、もううんざりしながらも、達筆に書かれた手紙を読み進める。読み進めるにつれて提督の顔は真面目なものに変わってきた。

曙はそんな提督を不思議がるように見つめる。あの提督が真面目な顔で手紙を読む？明日は猛吹雪かしら、など失礼な事を考えていることは提督には聞こえていないが。

「…そっか、もうそんだけ経つんだもんね。」

「んん？何が書かれてたのよ？」

「ぼのたん☆には内緒だ。いや、ここにいる艦娘全員に内緒にしようか。てなわけでー、明日、俺出かけてくるわ。」

「あらそう…で済ませると思うかー！」

「あつ！このやろつ！」

曙は提督に襲いかかるように飛びかかり、手紙を奪い取る。すぐに提督が「返せ！」と取り返しに手を伸ばすが、その手を叩いてついでに脛を強く蹴飛ばす。「ぐお……つ！」と変な声を出して提督がしやがみこんだ時に、曙は手紙を読み始める。

「ぐおおおお…!!鎮まれ…!なにゆえこの様に痛むか…!脛の神よ…つ！」

「ええと、なにになに……ふーん……。これ別に内緒にする必要なくない？」

「じゃあかしい…!ぐつ!?鎮まるのだ脛の神よ!汝の痛みは我の痛み!ぐおおお!!」

「うっさいー！」

未だに悲痛な叫びを発する提督の脛を曙はもう一度蹴飛ばし、そのまま提督ような椅子に腰を下ろす。その後にもた手紙を軽く読む粗振りを見せて、大きなため息を吐く。

ため息吐きたいのはこっちの方じゃ、なにしてくれてんねん。いくら今は人間だからって脛蹴られたら復活できないわ。ちくしょうめ。

「で?もう時期8月15日、終戦記念日だから戦争を終わらせた提督3人が集まる招待

状だつて？別に皆に言つてもいいじゃない。」

「ダメだな。一部の艦娘と付いてくるとうるさくなる。そんなのごめんだぞ。」

「でも秘書艦らしく誰かは連れてくべきじゃないの？」

「じゃあぼのたん☆来る？」

「木の根元に埋めるわよ。」

「なにそれこわい。」

まあ別にね、連れてつてもいいんだけどさ。一部の艦娘がうるさくなるのは本当なんだよ。金剛とか榛名とか、金剛型とか、金剛型1番艦とか。主に金剛だな。金剛が来るとなれば必然的に比叡もくる、ついでに榛名も。そうなったら霧島だつて便乗して付いてくる。なんて負の連鎖だ。

「まあいい、どうせ行かないし。」

「え？行かないの？なんで？」

「あー……。戦争を終わらせた三人の提督とは言われてるけど、別に俺はあいつらと仲良くねえよ。あいつらは捨て艦戦法を平気と採用してきたんだ、艦娘だつて命を持つてるし許せねえよ。」

「ふーん、まつ、あんたらしいわね。」

捨て艦戦法。

戦時中の一部の提督が採用していた戦法。艦娘には轟沈判定が存在しており、大破状態の進軍以外は轟沈しない事は判明されていた。

だが、あと一步で敵を沈められる時に一部の提督は、沈んでも沈めるという選択肢を選んだ。つまり、大破進撃して艦娘が沈められても、深海棲艦を沈める事で事実上の制海権を確保するという事。

確かに制海権の確保で深海棲艦を追い詰める事ができるが、沈んだ艦娘が戻ることはない。これについては世間的にも賛否両論が存在した。

まあ詳しくは省くが、俺以外のその三提督の2人はその戦法を採用していた。無論、俺との間でその討論は度々と起きたわけで、俺自身があの2人に苦手意識を持っているのかも知れない。何はともあれ、進んで会おうと思える人物ではない。

「はあ…ぼの、その手紙は捨てといてくれ。全く、良くないものを見たよ。終戦記念日ほどのみちこの鎮守府で過ごすと決めてたしな。」

「なんかする気?」

「…うちの鎮守府で沈んだ者はいないけど、この海で沈んだ艦娘も深海棲艦も未知数。その全ての娘に終戦を伝えるような内容さ。」

「まああんにんに全て任せるわ。」

「ああ、そうしてくれ。」

それだけ言うと、曙ももう用事がなくなったのか、トテトテと扉の方に歩いていき、ほのまま執務室を後にする。

珍しく鈴谷もいなく、1人になった提督は曙が出ていってしばらく経つと大きなため息を吐き出す。そのまま後ろを向き、備え付けられた窓を覗く。映る景色は太陽光を反射し、キラキラと煌めく美しき海。

「…終戦から2年、皮肉にも深海棲艦との戦争が終わったのも8月15日。あいつらは何をする気だ。」

戦が終わって二年経つ。

争いは2度と起きてはならない。

お前もわかつているだろう？

おれ達で当時は語ってみないか？

こちらに出てこい。

すてきな食事会にしよう。

「ベタなんだよ。ベタ。今どき縦書きなんて流行らねえよ。しかもなんだよあの文法は。初見で縦読みだつてわかっちゃうだろうに…。」

それは先程の手紙に書かれていた文章。普通に読めば、当時は語りながらの食事会を行おうという招待状になる。だが、縦に読むとそれは全く別な意味に変わる。

「戦争を起こす…。させるかよ。」

執務室の扉の前。曙は壁に背を付けながら提督の言葉に耳を傾ける。あの語り方からすれば、提督は自身の存在には気づいていないだろう。と言うのも、あの手紙を読んだ曙だからこそ、自分が出てけば提督が独り言を言うと言ったと読んだからだ。外に出て、その場で足踏みをして遠くに行つたと見せかける。足音をだんだんと小さくする。子供騙しだが、手紙の内容で頭がいっぱいの提督を欺くのには充分だった。

何にせよ、提督が出かけようとした理由、他の艦娘に知らせないようにした理由は明白。このことを知るのは提督と自分のみ。これからどうするかはまだわかっていないが、提督も残りの2人の提督もまだ行動を起こさないのは確か。

曙は足音を立てずに廊下を進んでいった。

安定しない記憶

時々、悪夢を見るんだ。手に馴染んだ装備を手に、深海棲艦を沈めてきた感覚。大破になりながらも母港に帰還できた喜び。うちの鎮守府ではないけど、同じ僕として現し世に呼ばれて沈んでいった苦しみ。

戦争は終わった。僕にとって、艦娘にとっては二度目となる戦争。ただ、兵器としてではなく、『艦娘』として、思考を持って戦った戦争。忘れるわけがないんだね。

何度も何度も夢に魘された。真つ暗な海に立たされて、いつ撃たれるかわからない恐怖。仲間がいない孤独を味わう夢を。

戦争は終わっても、艦娘だった僕達は戦争の為に作られた命。どの道を進もうと、戦争への執着心を魂に刻まれているんだ。

平和が怖い。

幸せが怖い。

…なんて、僕らしくもないか。戦争は終わったんだ。そう何度も言い聞かせてきたんだ。忘れたくはないけど、少しは記憶から消したいな。

だって、提督と過ごす毎日に怯えたくなんてないから。
独り呟く時雨。

仲間を何度も失った時雨には、他の艦娘よりも戦争への想いは強かったのか。
この想いを誰かに知られることは、これから先もないのだが。

「ネタに尽きた。」

「ヘーイ、提督うー。メタ発言はやめるネ。1回、記憶飛ばすヨ。」

閑話休題

「はっ!?!知ってる天井だ…。」

「それは…提督の部屋だからね。」

「おう、鈴谷。相変わらず人の部屋でくつろいでるな。」

まあ朝からコイツの顔を見るのにももう慣れた。と言うよりも、毎度毎度のやり取りするのに疲れた、の方が正しいか。

…うーむ、何やら良からぬ夢を見た気がするけど思い出せないな。いや、アレは夢か? やけに現実味と痛みを感じただけだな…。現に今も頭が痛いし。

昨日、いつ寝たのかすら覚えてないけど…。まあいい、どうせ思い出したところで忘れたくなるようなものだろう。

うむ、今日も今日とて清々しい程に最悪な1日の始まり方だ。

「とと…:そいえば金剛は?」

「ん?金剛さんがどうかした?」

「なんかあいつにすごく嫌な思いをした気がした。いや、なんだろう…:記憶が定まらないな。」

「うん、忘れた方がいいと思うよ。あれは提督が悪いし。」

…俺が悪い？つまり俺が何かしたとでもいうのか。いや、そうだとしても、記憶が定まらない事には繋がらない…。いや、もう忘れよう。考えてもわからんって事は、さほど重要なことでもないだろう。

…さて、今日は何するかな。

「鈴谷。」

「んー？どつたの、てーとくく？」

「暇だー。」

「ミートウーだよ。なーんかここの生活もマンネリ化してきたしねー。起きて提督の部屋でくつろいで、部屋に戻って寝るだけっていう生活スタイルが確立したし。」

「そもそも俺の部屋でくつろぐ理由が未だに理解ができない。…まあそれはこの際置いてくとして、本当にやる事ないもんだなー。」

時間は午後3時。間宮におやつでも食べに行くかーっと思っただけど、この時間は他の艦娘達で溢れかえってるか。なら駆逐艦と遊ぶのは…いや、やめておこう。長門の特権だ。うん、きつとそうだ。そんな気がする。

他にやる事なー。ぼのたん☆を弄るのは楽しくていいけど、今日は確か出かけてるんだっけか。金剛とティータイムつても、今はなんとなく会わない方がいいだろうし。

「…やべえぞ、マジでやべえ。」

「なしたの?」

「このままじやマジでネタ切れだぞ!!連載5話目にしてネタ切れとか洒落になんねえぞ!なんか、こう、アイデアはないか!」

「あ、提督。うしろ、うしろ。」

うしろ?何をこんな時に言うか。

鈴谷が指す提督のうしろ、つまり窓の方を見るとあら不思議。ずっと嫌な予感がしていた金剛さんが窓からニコニコしながら覗いてるじゃーあないか!うつわー、いい笑顔。

「…アイエエエエ!?コンゴウ||サン!」

「メタ発言ダメって言うてるネー。」

「おまつ!?!ちよ、まて!偽装はあかん!それはあかん!それだけはあか…「バーニングラブ。」アーツ!」

閑話休題

「は!? 知らない天井だ…。」

「なわけないでしょー。提督の部屋じゃん。」

「いや、言ってみたいジャン。」

「んー、で?なんで気絶したか覚えてる?」

「あーあーあー…覚えてないな。」

くそ…どういうことだ?なんとなく金剛っていう単語は思いつくがそれ以外はまるつきし覚えてないだど…!?

「まあいい、いいだろう、忘れよう。」

「そうだね、そうしなよ。」

と、似たようなことを2度繰り返した執務室にノックが響く。鈴谷と提督は扉の方を向き、提督の「いいぞー」の声のもと、「失礼するねー」の一言と同時に扉は開かれる。入ってきたのは元正規空母の飛龍だった。

「お、どうしたひりゅー。」

「いやあ提督どうせ暇でしょ?」

「言い方腹立つが…まあ暇だな。」

「なら丁度いいや！今さー、蒼龍と一航戦の先輩方とで弓道やってるんだよね。提督も確か心得あったでしょ？一緒にどうかかなーってね。」

ほう、弓道か。確かに俺は学生時代を弓道と麻雀で過ごした寂しい学生時代があるが……。いや、いい、これ以上精神に傷を負わせる訳にはいかん。まあとりあえず弓道部でもあつたし、久しぶりに弓を握ってみるのもいいかもしれない。

提督は飛龍に「じゃあ俺もやるかな。」と一言返し、飛龍と弓道場へと向かう。

戦時中は空母達が己の技術に磨きをかけるために使用してきた弓道場。戦争が終わって取り壊しをしようかと思つたが、ここは空母達にとって、辛いながらも仲間と多くの時間を共有した場所。

今でもしつかりと整備されていて、ほぼ毎日誰かしら利用している。

工廠だつてそうだった。戦争が終わつた今では使わないけど、この工廠で多くの艦娘達に出会つた。今では家族みたいに思つている艦娘達が生まれた場所。当の本人らは気にしてはいないが、俺にとつては思い出の場所だ。

入渠場、今は普通の温泉。まあこれだつて思い出の場所だ。壊さずに浴場として利用している。

なんだかんだ、こう考えてみればこの鎮守府自体に思い出が詰まっている。戦時中は特に気にも留めなかつたが、終戦してみれば見える世界も変わってくる。ここにいる家

族達を包む暖かい家がここにあった。

「よおーし！それじゃ提督！発かましてよー！」

弓道でかませってなんだよ。

飛龍の言ったとおりで、弓道場には一航戦と二航戦の4人だけがいた。テンション高めの二航戦に急かされるように俺は弓を握る。

「ていとくのー、ちよつといいところ見てみたい！」

「オツサンか！」

「ふふーん、的の真ん中外したら間宮さんのところ奢ってね！」

「一方的すぎるだろ…。」

「真ん中に当たつたらあ…私を好きにしても…いいよ?」

「忘れんなよそのセリフう!」

やべえどつちがオッサンかわからなくなってきた。

「ぐっ…たかが数年のブランクで俺が的の中心を外すとは…!」

現在は間宮の甘味処に来ている。言わなくてもわかるはずだ、そう、見事に的の真ん中を外しました。結果、まあ見ての通りだな。間宮にて一航戦と二航戦にパフェを奢ることになった。

「食べすぎたら太るぞー。」

「運動もしたし大丈夫だもーん。」

なけなしの言葉も見事に返される。弓道、あれ以外と見た目によらず体力使うんだよね。弓引くだけじゃない加減にしろ、って思うやつはやつてみるといいかもね。

(作者：あ、俺そういうえば弓道なんてやったことないな(・q・))

「まあ、たまにはこういうのも悪くないな…。」

間宮に顔出すのも大体週に1回程度。その大半も1人で来る為、大勢で甘味を食べるのは随分と久しかった。楽しくないと言えば嘘になる、だからと言ってまた大勢で来たいとも思わない。きつと大勢で来た場合は全額俺が出すはめに…。間宮のところ、結構お値段高めなんだよなあ…。

それでも今度は鈴谷達でも誘ってみるか。なんだかんだで毎日顔合わせてるし、甘味を食べる時間を共有しあうのもいいかもしれない。

赤城が3個目のパフェを頼んだあたりで、提督の顔も絶望の色を濃くしていく。ただ、口元がにやつと上がってるあたり、提督自身もそんなに悪く思ってはなさそうかもね。

今日も鎮守府は平和だ。

「甘味代…20000円超えだと…!?」